



出版クラブ会報
第222号

一、情況は変わった

三年前私はこの『出版クラブだより』に「出版の国際化ということ」という小論を書いた。IPAストックホルム大会に参加した感想をもとに、出版の国際化とは何かを自問自答しながら、出版界の心ある人々に対して問題を投げかけたつもりだった。それからたった三年の間に、日本の出版界を取巻く情況は急激に変化した。日本の出版界自体の変わり方とは関係なく、外国の出版関係者の日本を見る眼が大きく変わったのである。日本の出版界の人々はそれに気づいているだろうか。それは、日本の全体像について、海外の見方についてある変化でもある。最近私が体験した二、三の例を紹介しよう。

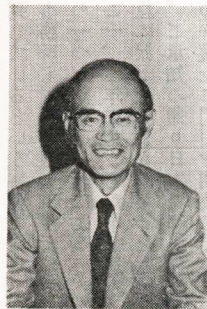
二、青い眼の編集者

今年になって私のところに偕成社で働きたいという海外からの依頼が相次いで舞込んだ。一つはフランスの青年から、もう一つはカナダの女性編集者からである。フランスの青年はパリのM出版社の跡取り息子で、まだ二十歳だが、すでに一年余り自分の出版社にパートタイムで働いた経験をもつ。知人を介して本人の親代りの実兄社長から私宛に鄭重に依頼してきた。

ものである。ぜひ日本で修業させたいので、大いに仕込んでほしいという。カナダ女性編集者の方は全く見ず知らずの関係だが、出版物を通して、またボローニア展その他で偕成社を知ったので、ぜひ働かせてほしいと手紙をよこしたのだ。送ってきた書類をみる

期待される日本

再び出版の国際化について



今村 廣
(いまむら・ひろし)

と、かなり能力は高そうだが、英語しか出来ない者を雇う程の余裕はない。結局、目下日本語を猛勉強中というフランス青年だけを受入れることにした。この青年は現在我が社で勤務中である。

このように海外から、それはいわゆる先進国から、こうした依頼を受けたのは私も初めてであった。私は驚くとともに、「事態は変わった！」と痛切に感じた。とい

風土の中では、厳しく暖く画家の才能を引き出していく名伯楽が生れにくい。これはひとつ、絵本づくりに永年の伝統をもつ国の優れた出版社にとびこんで、実地修業させる他ないというのが私の結論だった。そこで私は信頼するスイスのS出版社の社長に私の考えを述べ、若い編集者を二、三年修業させてほしいと依頼した。幸いS社長の快諾を得て、私は将来を嘱

- 主 記 事
- ▽期待される日本
再び出版の国際化について——
秋田貞夫(秋田書店)のあゆみ
 - ▽冒険王物語
秋田貞夫(秋田書店)のあゆみ
 - ▽藤田達夫社長の死
牛来武知
 - ▽尾瀬ハイキング
大橋祥宏
 - ▽出版関係受章者祝賀会開く
 - ▽出版歳時記▽転換期の出版界

今村 廣：一・三
秋田貞夫：四・七
牛来武知：六
大橋祥宏：七
(骨)：八

望する若い女性編集者の一人を企業留学に出したのだった。

「うーん、世の中変わったな！」というのが私の実感である。気がついてみると毎年参加しているボローニア児童図書展でも同じような変化が起きている。十年前初参加の頃はこちらから各国のスタンダードを巡るだけだったのに、数年前からは「何かを求めて」積極的に偕成社のスタンドを訪ねてくる各国編集者が急激にふえてきた。偕成社の新作、目玉商品を見にやってくるのは勿論だが、それだけでなく障害児関係の出版や布の絵本などの説明を聞かせてほしいとか、出版企画のアドバイスから児童文化、社会評論に至るまで、意見を求められたりすることが多くなった。単なる商取引の相手としてでなく、お互に啓発し合う仲間として期待されるように変わってきているのである。

三、才色兼備の留学生

今年の初め三か月間我が家にアメリカの女子学生D嬢を預った。そのこと自体は我が家にとつては、もはや珍しいことではない。実際過去十年の間にアジアを含む十人を超える海外からの若い男女が、私の家にやってきた。短い者は数日、長い者は約一年、ロータリー交換学生が主だが、知人友人に依頼されてホームステイを受けた場合もあった。どれも各国の若者気質を知る上で私にとって貴重な体験だった。例えば、一口にアメリカの若者といっても、人種、宗教、生まれ育った地方によって様々であり、同じ尺度で見るとは出来ないことを肌で知ったのも収穫である。

だが今度のD嬢からは、ずばり現在及び将来の日米関係や、現代アメリカエリート学生の生き方などを暗示されたような気がする。彼女は一昨年夏ハーバード大学を卒業直後、ロータリー財団の奨学金を得て来日、一年間国際キリスト教大学で日本語を学び、昨年から東大大学院特別研究生として日本のマスコミを勉強していた。

六月初めアメリカに帰ったがパツチリ大きな眼、抜けるような白い肌に金髪、加えて頭腦明晰、才色兼備とは彼女の目にある言葉かと思われる程の美人だった。既に日本語も上手で、おかげで朝に夕に、私はこの絶世の美女と食卓で向い合いながら大いに会話を楽しんだ。私が一番驚いたのは、彼女が勉強よりもアルバイトに精を出し、せっせとパーティーに出席したことである。東大にいくのは週一日か二日で、あとはアメリカに本社をもつ大手の某経済コンサルタント会社の東京事務所に出勤した。時々土曜日も出かけていく。オフィスは休みだが、仕事に間に合わないで出勤してレポートをまとめるのだという。次第に

わかったことは、彼女は将来この経済コンサルタント会社で働きたいと思っていること、それも出来れば日本やアジア地域の調査を担当するこの東京事務所で働きたいと考え、日本留学の間にそのための多くのコネを作ろうとしていることなどだった。パーティに出席するのも、アメリカ人としては当然ながら、重要な自己売り込みの機会なのだ。アメリカに帰って一年程働き、そのあとロースクールかビジネススクールで勉強し、この会社に入るつもりだと帰る前に語っていた。

もう一つ私が強い印象をうけたのは、現代アメリカの若者の志向についてだった。D嬢は典型的な東部のエリート学生である。だからもちろんアメリカの若者の多数派を代表しているわけではない。私も彼女を通して直ちに若者像を推論しようなどとは考えていない。ただ将来アメリカの指導的立場に立つ若者の志向の一端を知ることが出来たと思っている。つまり彼女は日本留学や日本をよく知っていることを、仕事のアドバンテージに利用しようとしているのだ。彼女の話からうかがえることは多くの知的アメリカ青年の間にはそうした志向があるらしい。どの国でも時代の流れに敏感な若者のこと、日本経済の優秀性やこれからの日米関係の重要性を考えれば当然と思えるのだが、この当然のことに、アメリカのエリートたちやエリートの卵が気づいたのは、ついこの二、三年來のことだ

という。日本を見る彼らの眼も変ってきたのである。

四、国際法律事務所の話

近年日米間の経済取引が多くなつて、これに伴う契約・法律事務も激増し、こうした国際取引を扱う法律事務所も多くなった。それも当然とうなずける話だが、問題はアメリカのロースクールを卒業した弁護士や在学中の弁護士の卵から、働かせてほしいとの希望が東京のこうした法律事務所に殺到しているという事実である。T事務所も国際弁護士事務所の中堅の一つだが、その話によると、ここ一、二年來そうした申し込みが急に沢山くるようになったという。ご承知の通り日本ではまだ外国の弁護士に門戸を開放していない。日本の弁護士資格を取得していない者には弁護士活動を認めないものである。このことが、アメリカ側が門戸を開放しているのと対比されて日米間の懸案事項の一つとなつてきているのだが、正式に弁護士活動が出来ないのは承知の上で、いわば影武者でよいから働きたいというのである。日本で働きたいというところが、実際の知識体験として大事だけでなく、将来の大きな武器となるというところらしい。第二次大戦後、多くの分野で日本の学者、ビジネスマンが欧米志向に狂奔したのと同じことが、いまや逆の流れで起りつつあるのだ。同じことは先端科学の一部でも起りつつあり、筑波研究都市への海外からの研究希望若手学者が多いとも聞いた。こうした「日本

へ日本へ」という若者の波は、私の身近に沢山ある。その一つ、昨年アメリカ東部の大学を卒業して、米放送会社の東京勤務になった青年がいる。末娘のクラスメートということで親しくなったのだが、これも日本勤務の実績とコネを最大限に生かそうとしているのが見え見えなのである。

考えてみれば、アメリカ人にとっては、ヨーロッパはすでに開拓されつつしている上に、ヨーロッパ経済自体が衰微の方向にある。まだ未開拓の日本やアジアに眼が向くのは当然である。まして日本経済が活力がある上に、よく理解できないながら日本という国も国民も、何か深い文化や生活をもっているらしいとなれば、若者にとって興味の的、関心の対象となるのは自然のなりゆきといえよう。ただ蛇足ながら、特にこれから東部のエリートたちは、まだ日本を利用しようという段階で、好奇心はあるが、心の底から対等のパートナーとしては考えていないし、日本や日本人に対して、まともな敬意を払い謙虚に学ぼうというところまでは来ていない。そうなるには、もう何十年かかかるものと私は考えている。

五、アメリカ南部旅行

四月末にフロリダ、ニューオーリンズなどアメリカ南部を旅行した。予想外だったのは、タクシー運転手、バスガイド、ホテルのボーイ、大学院学生など接した庶民たちの声であった。日米経済摩擦が叫ばれる折柄、日本や日本人に

教育、文化にも関心が向き始めたといえよう。先述のフランスの編集者やアメリカの弁護士やビジネスマンの日本志向に象徴されるように先進国といわれる国の人々の間にも、カメラ、ビデオといったハードだけでなく、日本人や日本社会のもつソフトを学ぼうという機運が生まれつつある。流れは明らかに変わったのである。はたして日本側に、この期待に答える対応が出来ているだろうか。

七、いわゆる国際人の役割

アジア、アフリカ諸国に対する技術援助、教育指導等についてすでに日本も幾多の実績をつんでいる。しかし文化面、目に見えない思想やソフトに関してはこれらの国々に対しても、日本は適切な対応が出来ていないとはいえない。その原因の一つは、私は日本人の中で従来日本を代弁する役割を果たしてきた「国際人」「国際的視野」といわれるものの内容の問題があると思う。簡単にいえば英語に堪能な人の中味である。明治以來これらの人の果たした役割は外来文化の紹介だった。その歴史的な役割は高く評価されるが、日本を取巻く海外の情勢が大きく転換した今日、従来型の国際人や「英語を喋る人」では、もはや新しい事態に対応できないのではなからうか。お叱りを覚悟であえていわせて頂くと、歴史的要請が逆転しているにも拘らず身についた意識は変わらず、新事態に戸惑っているのが実情ではあるまいか。分野によって異なるが、いわゆる国際

通、海外派が急速に発言権を失いつつあるのはその証左だと思う。これから期待される新しいタイプの国際人とは、海外からの期待にこたえて、そのよき相談相手となりつつ、日本のよき文化やソフトを海外に伝える役割を果たすものでなければならぬ。となると、そのための人材の養成も本人の心構えも百八十度変わったものでなければならぬ。日本の社会全体についていえることだが、ましてほとんど輸入一辺倒だった出版界は対応をいそぐ必要がある。

八、「布の絵本・さわる絵本」の

海外の反応

十年ほど前から日本で、主として母親グループのボランティア活動による「布の絵本・さわる絵本」の製作が始まり、年を追って盛んになった。その詳細は他の機会にゆずるとして、当初知恵おくれの子や盲児のための遊具・教材として作られた布の絵本・さわる絵本が、障害をもたない子供たちにとっても、紙に印刷した従来の絵本や木やプラスチックとは全く異なった、優れた機能をもち、心に暖く働きかけるものとして高く評価されるようになったことはご承知の向も多いと思う。私たちは、数年前から各地の製作グループ間の情報、技術交換の場として、また一般の人たちへの普及を願って、その展示会を行い、各方面から多大の反響を呼んだ。そしてその実情を、英文リポートにまとめ海外各国に紹介した。その結果、先年の国際障害者年には各国

から「布の絵本・さわる絵本の展示会」を開きたいから作品を提供してほしいとの依頼を受け、世界約十三か国に対し作品を送ったのだった。展示会を行った各国からの反響は大変なもので、日本のこの活動が各国の児童文化関係者、障害者関係者、幼児教育、芸術関係者等に与えた影響は、各国のマスコミにも大きく取上げられた。日本から送られた作品が見本となり、種となって、世界の各地で同じような絵本が作られるようになったというニュースを聞いて私は、ひそかに喜んでいる。

つい先日、私は米国アイオワ州、デューク市の知人から一つの新聞記事を受取った。六月十日付の『テレグラフ・ヘラルド』で、それには先年日本から送られた布の絵本を見て、触発された女性アーティストが、その魅力のとりことなり、事後その製作に熱中して、この程その作品展を開いたことが報じられていた。記事の中でその女性アーティストは「日本の布の絵本を見て新しい世界に目を開かれた」と語っている。私は嬉しかった。小さなことかもしれないが、こうして海外の人たちの内面に影響を与えることに訴えかけることこそ、国際的な分野で私たちの果たすべき大事な仕事だとかねてから思っていたからである。

九、「おはなしきやらばん」と

翻訳賞

児童図書分野の活動の一つに、「おはなしきやらばん」がある。やはり日本で始まった独自の

活動で、絵本などを素材に、16ミリやスライドを使つての語りきかせ、人形劇や歌なども交えて、子供たちを楽ししい物語りの世界に引き込んでいくというものである。関係者は色々と工夫をこらした技術的修練をつんで、子供をすばらしい想像の世界にさそい込もうと苦勞されている。民間の自発的文化運動の一つである。日本各地を巡るのはもちろんだが、時にはアメリカ、カナダに遠征し、東南アジアを巡業して、至る処で大歓迎を受け、その地の子供たちや、関係者に大きな感動を与えている。ところが、海外に対してこうしたすばらしい仕事をしていることが、日本では案外知られていないのは何故だろうか。私はやはり、先にも触れたように日本の従来の国際派の性格によるところが大きいと思う。否、日本の社会そのものに長年培われた性格といつてもよいかもしれない。例えば児童図書分野でも、つい数年前、新たに翻訳賞が設けられた。数多い賞の中には色々なものがあつてよいではないかといえはそれまでだが、私はこの一九八〇年代にもなつて今更という感じを否定することが出来ない。明治・大正や昭和と三十年代くらいならまだしも、今になって翻訳賞を新設するとは――。未来に向つて眼を開くべき出版界としては誠に物足りない。その逆の、海外に対して日本の児童文化を紹介することを奨励するような賞こそ新設されてほしいと思う。

十、子どもの本の世界大会

三年後の一九八六年八月、世界児童図書評議会(略称IBBY)の世界大会が東京で開かれることになった。二年に一度行われる総会で、ちょうど二十回め、世界約七十か国以上から内外の参加者五百人が予想される。ホスト国として私たちは資金調達、プログラムの準備など大変だが、日本の児童図書出版界が世界の一員として繁栄と存続を願う以上、この程度のサービスの世界から期待されるのは今や当然との見地から開催を引き受けることになったのである。

アジアで開かれる初の大会だけにアジア、アフリカ諸国の期待も大きい。世界の児童図書関係者――研究者、評論家、図書館員、編集者、作家、画家など――に日本を知らせる絶好の機会であり、また来日する世界の優れた個性ある人たちから、日本の私たち関係者にもちろん、一般の人たちも大きな影響を受けることが期待される。ただ、海外の優れた人、傑出した才能から大いに学ぶのは当然のことながら、こういう時をとらえて、日本の児童文化をはじめ、文化・社会全般に亘つて日本のことを理解して貰う姿勢と努力こそ大切だと思ふ。先に触れた「おはなしきやらばん」などもその一つの例として、このIBBY東京大会のイベントとして大いに紹介したいと願っている。何れにしても海外から学ぶと共に、海外にも影響を与える――その両方がバランスよく行われることこそ、新しい時代の

要請であり、日本は世界からそのことを期待されているのである。出版界全体もそうだし、児童図書の世界においても同様である。問題は日本の社会全体を含めて、出版界にそれに対応する心構えと用意があるかであり、少しずつ意識的に自己変革していくことの大切さを関係者が強く自覚することである。時代の進展、変革とはそういうものであり、売ればいい、売れる本を出せばいいという姿勢では、やがては自ら立脚する地盤も崩壊を招くことになるであろう。確実に舞台は回転し、流れは変わった。経済・政治で世界からは日本が期待されていると同様、私たち日本の出版界も世界から期待される立場に変わらなければならない。私たちがそれを自覚して、期待されるにふさわしい内容をもつこと、そしてアジア、アフリカはもちろん、先進諸国に対しても、思想・文化その他何らかのソフトを提供すること、これがこれからの出版人の仕事である。

(備成社社長、出版クラブ常任理事)

日本出版クラブの保障制度

ご家族の安心と
病気やケガの入院保障に

大型保障
医療保障
無配当

引受会社 日本団体生命

TEL 200-5106 担当 佐藤